

clover

~from Rodley~



浜田 薫

その日、リーシャが朝の仕事を終えて鶏舎から出ると、空は金色の太陽を掲げ、薄い水色に輝いていた。道端に群生するクローバーは朝露に光り、その白い花の周辺では、つがいの蝶々が互いに追いかけ合うように舞っている。朝の空気に澄んだそよ風は涼しくも撫でるように優しく、家の裏に位置する新緑が眩しい森からは、飛びかう鳥の囀りが、耳を澄まさずとも聞こえてくる。エルダーの他の地域と比べやや遅れてではあるが、ロドリー村にも、短い夏が今年も巡ってこようとしていた。

以前はリーシャも他の人同様に、その短くも喜びに満ちた季節を明るい鼻歌と共に迎えていた。しかし今、リーシャのまだあどけなさが残る口元は、むっつりと固く閉じられていた。たとえ赤く熟れた野いちごの芳醇な香りさえ、今の彼女を心から笑顔にすることは難しいだろう。

まだ温もりの残る新鮮な卵の入った籠を手にかかると、リーシャは落ち着きなく何度も立ち止まっては、家の前の道——村の中央へと続くその方向に目を向けた。そして、そこに期待する影がないことを確認してはその都度、閉じた口の端を更にむっつりと下げるのだった。

「ああ、リーシャ。パックを起こしてきておくれ」

開けっ放しの勝手口から台所に入るなり飛んできた母親の言葉に、リーシャは籠を置くと、軋む階段を上り二階へ向かった。

今年で三つになる弟のパックは、いずれは貴重な男手として家の仕事を担っていくのであろうが、今はまだ赤ん坊と大して変わらない。何かと忙しい母に代わり、日中は主にリーシャが子守をしているのだが、最近は何をしてもイヤイヤと駄々を捏ねては声の限りに泣き喚くので、たまに本気で憎らしくなる時もある。

とはいえ、母のお腹にいるときから、早く出ておいで一緒に遊ぼうと、姉と二人で声をかけては、その誕生を待ち望んだ可愛い弟だ。実際今、祖母が昔作った、姉もそしてリーシャも幼少の頃使ったキルトに包まれて、寝床でくうくうと寝息をたてている寝姿は天使のようにも見える。

リーシャは、眠る弟の小さく柔らかい鼻の頭に軽くキスを落として夢の世界から呼び戻すと、むずかり悪魔に変身しようとする彼をなんとか宥めすかして、朝の支度が整った食卓へと連れて行った。

「そうだ、リーシャ。後で部屋に行ってください」

小麦のパンにじゃがいものスープという、いつも通りの献立が並ぶ朝食の席で、父親がふと思い出したようにそう言った時、リーシャは、隙あらばスープ皿をひっくり返そうとするパック相手に奮闘していた。機嫌がいい日は、盛大に零しはするもののきちんと食べてくれるのに、今日は機嫌が良くない日らしい。

「部屋？ 私の？」

きよとんとして尋ね返すリーシャに、母が父にスープのお代わりを渡しながら言う。

「きっと『いいもの』があるよ。よかったね」

「いいもの？」

リーシャは両親の言葉の意味がすぐには分からず、不思議顔で目を瞬かせたが、はっとなって顔を輝かせると、勢いよく椅子から立ち上がった。

「姉さんからの手紙ね！ 手紙が来たのね！」

突然の大きな声とその行動に驚いたパックが、火がついたように泣き出したが、リーシャは見向きもせ

ず一目散に部屋へと駆け出した。

四つ年上の姉が、山向こうの遠い町に嫁いで、もうすぐ一年が立つ。

綺麗で優しく、いつだってリーシャを可愛がってくれた姉は、リーシャの自慢であり、家族の中でも特別に大好きな存在だった。勿論、女子である限りいつかはそれぞれ他家に嫁ぐ日が来ることは分かっていたが、まだ子供のリーシャの狭い世界では、その相手は同じ村の人間以外に考えつかなかったし、まさか山ひとつ離れた遠くに姉が行ってしまうなんて想像もしていなかった。

『たくさん手紙を書くわ。だから、そんな顔しないで笑ってちょうだい』

旅立つ前日の夜、行ってはいやだと泣きべそをかいたリーシャに、姉は少し困ったように笑いながら、そう約束した。

だがその約束は、リーシャが思ったようには果たされなかった。月に一度便りがあればいいほうで、長い時など二ヶ月近く音沙汰がなかったりもする。リーシャがそのことで不満を口にするたび、両親は揃って呆れ顔になってまともに取り合ってくれないが、リーシャには姉が距離だけでなく本当に遠い人になってしまったようで悲しく、また少し、悔しくもあった。

その姉から、待ちに待った手紙がきたのだ。

実は言えば、先週からずっと今か今か待ち続けていた。今朝むっつりとした顔で、村へ続く道を見ていたのだから、なかなかやってこない郵便配達人の姿を探してのことだ。

恐らく配達人の都合で昨夜遅くに届いたのを、父が自分を驚かせようと、朝の仕事の合間に部屋に置いてくれたのだろう。

頬を興奮に赤く染め、期待に胸を躍らせて二階の自分の部屋へと駆け戻ったリーシャは、迷うことなく真っ直ぐ机へと向かった。

しかし、綺麗に片付けられた机の上には、それらしきものはない。

ならば。と、リーシャは勢いよく背後のベッドを振り返った。部屋には、机とベッドと小さな衣装ダンスしか家具はない。机の上になければ、ベッドの上しか考えられない。だが。

振り返ったリーシャの目に映ったものは、手紙ではなく、一枚のドレスだった。

それは、今リーシャがエプロンの下に着ている、濃い灰色をしたモスリンの実用的なワンピースとは全く違う種類のものだった。

まるで今朝の空の色のような水色をした生地はオーガンジーで、ウエストを飾るリボン帯は青いサテン。ふっくらと膨らんだ袖口と裾は、段になっていてレースのフリルがあしらわれている。

自分のベッドの上に横たえるように置かれたその、非実用的で、華やかで、年頃の娘の虚栄心を満足させる美しいドレスを、リーシャは少しの間、声もなくぼうっと見つめていた。

「お父さんがね、あんたのために買ってくださったんだよ」

声に驚いてリーシャが顔をあげると、いつのまにか母が、見慣れない箱を持って部屋に入ってきていた。「寸法は私が指定した通りだから、間違いないと思うよ。あんたが三週間以内に、急激に太ったり痩せたりしなければね」

「三週間？」

まだどこか夢を見ているような面持ちのリーシャに微笑みながら、母が手に持っていた箱の蓋を開いて見せる。中に入っていたのは、金の刺繍を施した青いサテンの靴だった。

「生誕祭の舞踏会用だよ。あんたも今年で十四歳だからね。ハランド家のお屋敷に行かなくちゃだろ？」

「え、」

「ちょっと贅沢だと思わないこともなかったけど、うちは女の子はあんたで最後だし、こんな機会ももうないだろうからね。なあに、これくらいの出費どうってことないさね。去年の収穫も良かったからね。どれ、ちょっとドレスを合わせてご覧。ああ、靴は泥がつくとシミになるから、実際に履くのは当日、お屋敷に着いてからだよ」

リーシャは一気に夢から覚めたような気持ちになった。戸惑うリーシャを他所に、母は一人口を動かしながら、ドレスの肩の部分を持ってリーシャの体に合わせはじめる。リーシャはそんな母の行動に慌てて言った。

「待って、母さん。私、生誕祭の舞踏会には、姉さんのドレスを着るって言ったよね？」

「ああ、あれねえ。でも、ミシェルとあんたじゃ身長も目方も違うし、入らないことはないだろうけど、あんたが着たら、つんつるてんになっちゃうよ。それにミシエルのドレスはほら、山吹色だったろう？ ミシエルの髪の色にはよく似合ってたけど、あんたの金髪には似合わないよ」

「でも、」

「うん。やっぱりこの色にして良かった。お父さんは赤にしようって言ってたんだけどね。私は、絶対こっちの色の方が似合うって思ったんだよ。あんたの目は私に似て、ちょっと青みがかかったグリーンだから……」

嬉しそうに誇らしげな声で言いながら、リーシャの顔を見やった母が、娘の顔に張り付く困惑の表情に気づいて、声の調子を変えた。

「なに、気に入らないのかい？」

「……、そうじゃない。すごく、すごく素敵よ。……だけど、でも……」

気に入らないわけではない。リーシャだって最初は、うっとりで見惚れていたのだ。きつとこのドレスを見たら、舞踏会に出席する少女たち全員が、いや、村の女性たちみんな、感嘆のため息を吐くことだろう。もしかしたら、ハランド家のお嬢様のドレスより、美しいかもしれない。

それにたとえ美しくなかったとしても、両親がリーシャのためだけに用意してくれたドレスだ。

リーシャの家は、殊更貧しいわけでもないが、かといって贅沢が出来るほど裕福でもない。母はああ言っていたが、ドレスの費用を捻出するために多少の無理はしているはずだ。それを分かっているのに、気に入らないなんて思えるほどリーシャは恥知らずではない。

しかし、そう思う気持ちは本当ながら、リーシャにはもうひとつ、譲れない強い気持ちがあるのも事実だった。

その気持ちをどう伝えればいいのか、リーシャが考えあぐねて口ごもったその時、階下から父の呼ぶ声が響いてきた。母はそれに大きな声で返事をする、いつもの忙しそうな顔に戻り、ドレスを押し付けるようにリーシャに手渡した。

「後で、お父さんにお礼を言うんだよ。それから、ドレスは皺にならないようちゃんと吊るしてタンスの中に入れてお置きね。パックに汚されてもしたら、一大事だ」

そして口早にそれだけ言うと、リーシャが言葉を見つけるより早く、部屋を出て行ってしまった。

リーシャはドレスを抱えたまま、一人その場に立ち尽くした。その顔は、見る者がいれば、今にも泣き出しそうに見えたことだろう。

生誕祭の舞踏会というのは、エルダーの女王アメリア陛下のご生誕日を祝って、ロドリー村を含むテドール地方一帯の領主であるハランド家の旦那様が毎年開く祝賀舞踏会のことだ。

貴族主催の舞踏会など、本来ならリーシャたちのような庶民には無縁の場だが、ハランド家の旦那様のご好意で、テドール地方に住む十四歳から十七歳までの若い男女全員に招待状が送られる。

無論、出席するもしないも個人の自由だが、娯楽の少ない村の生活の中、普通ならば目にもすることも叶わぬ煌びやかな世界を垣間見れる一年に一度の日とあって、毎年テドール中の多くの若者が出席する。特に、リーシャのように十四歳になったばかりの娘は、どこの村からもその殆どが出席する。まだ夢見る年頃を過ぎていない少女たちにとって、美しいドレスに華やかな舞踏会という言葉の響きは、魔力にも似た抗えぬ魅力があるのだ。

リーシャも幼い頃から、舞踏会に出られる日を待ち望んできた。同じ村に住む年上のお兄さんお姉さん達から聞く舞踏会の様子にうっとり酔いしれ、実際に姉が十四で舞踏会に出た後は、何度も何度も姉にその夜の話の話をせがんだ。

そんな憧れの舞踏会に、この上なく美しいドレスを着て行けるのだから、本当なら、飛び上がって大喜びするのが普通だろう。

しかし、リーシャには夢があった。姉のドレスだ。

リーシャの姉は母の出産などの関係で結局、十四歳の年しか舞踏会に出席しなかったが、その時に姉が着ていたドレスは、リーシャの目にはまるでお姫様のそれのように見えていた。そして、美しく着飾った姉は村の誰よりも美しく、本物のお姫様のようにだった。

庶民の家庭では、舞踏会用のドレスなんて非実用的ものに、そうそうお金をかけてはいられない。だから、娘が二人以上がいる家は、大抵、年少者は年長者のお下がりのドレスを着るのが通例だ。姉妹がいなくても従姉妹などが着たドレスを譲り受ける娘も多い。

まだ幼い少女の中には、お下がりという名のお古を不満に思う者もいたが、リーシャはむしろ、姉と同じドレスを着られることが嬉しかった。あの日の姉の美しさを思い出すたび、自慢に思い、自分も十四歳になったら同じドレスを着て、姉と同じように美しく着飾ろうと心に決めていた。それがずっと、リーシャの数少ない夢のひとつだったのだ。

それがまさか、こんな形で水を差されるとは思ってもいなかった。

両親の気持ちは、有難いとリーシャも思う。自分のためだけのドレス、しかもこんなに美しいものを仕立ててもらえるなんて、同じく姉のお下がりを着る予定の友人たちが聞いたら、羨ましさのあまりどんな

声をあげるか分からないほどだ。

しかし、それでもリーシャは、姉のドレスを着るという夢を諦められなかった。諦めきれなかった。
(だって、約束したんだもの……)

リーシャは項垂れるように、胸に抱えたドレスに目を落とし、きゅっと唇を噛んだ。

そう。リーシャは約束を交わしていたのだ。父も母も知らない、姉と二人だけの秘密の約束を。

それはまだ、姉がお嫁に行くずっと前の、リーシャが十歳の頃の話だ。

家の裏手にある森を流れる川の傍で、リーシャは姉に髪を編んでもらっていた。その日はリーシャの希望でお姫様ごっこをしていて、リーシャがお姫様役だった。着ている服は勿論いつもの普段着だったが、少しでもお姫様らしい雰囲気を出すために、髪を編みあげてそこに王冠に見立てた鱈甲の櫛をつける計画だった。

姉がリーシャの髪を編んでいる間、リーシャは、太陽の光を浴びて蜂蜜のような光沢を放つ鱈甲の櫛をうっとり眺めながら、大事に両手で持っていた。それは、姉が舞踏会に出た際に母から譲り受けたもので、いずれリーシャが舞踏会に出る時には、リーシャの髪を姉の時と同じように飾る予定のものでもあった。本当なら、遊びで外に持ち出していいようなものではないのだが、姉は幼い妹の憧れを充分に知っていたのだろう。お母さんには内緒ねという約束のもと、大事にしまわれていた戸棚から二人でこっそり持ち出してきたのだ。

姉は器用で、三つ編みしか出来ないリーシャと違い、四つ編みが出来て、リーシャの髪を可愛く編んでくれていた。リーシャはそれを、川の水面を鏡に、嬉しさを隠すことなく顔に出して見つめていた。

しかしながら、いざ櫛を挿す段になって、そのお姫様計画は一気に困難になった。リーシャの髪が柔らかく細すぎるために、止めても止めても、すぐに櫛が滑り落ちてきてしまうのだ。

何度やっても滑り落ちる櫛を目に、リーシャは悲しくなり、ついにしくしくと泣き出した。その頃にはもうリーシャの胸には、姉と同じ出で立ちをして舞踏会に行くという夢が芽生えていたのだ。

しかしドレスは着られても、母や姉と違う、父親譲りの自分の髪質では、姉のように櫛を挿すことは叶わない。舞踏会の日姉の美しい姿に強い憧れを抱いていただけに、その事実は、幼かったリーシャの心を酷く傷つけた。

姉は優しく頭を撫でたり肩を抱いたりして慰めてくれたが、それでも尚涙で頬を濡らし続けるリーシャに、その時、こう言ったのだ。

『泣かないで、リーシャ。あんたが初めて舞踏会に行く時は、私がきつと、あのドレスにもあんたの髪にも似合う、素敵な髪飾りを見つけてあげる』

リーシャが川の傍で泣いたあの日から、約四年。その間に弟が生まれ、姉が遠方に嫁ぎ、そしてリーシャは十四歳になった。三週間後には、リーシャにとって初めてとなる生誕祭の舞踏会が開かれる。

姉は、あの約束を忘れてしまったのだろうか。

「リーア、とーとー虫！」

声と同時に、によきつと目の前に突き出された小さな手に、リーシャは物思いからはっと現実に戻った。

にこにこ嬉しそうに手のひらを見せるパックに、彼が捕まえたのだろうその、赤に黒の水玉模様をした虫の正しい名前を繰り返す。

「てんとう虫ね。て・ん・と・う・む・し」

「とーとー虫！」

自分では正しく言えているつもりなのだろう、パックが満面の笑みで答え、その振動が手に伝わったの

か、てんとう虫が羽ばたき去っていく。それを追うようにしてパックがまた野に駆け出していくのを、リーシャは家の前の柵に腰掛けたまま、小さく息をついて見送った。

午前の仕事を終えてから夕食の手伝いの時間までは、リーシャの自由時間だ。といっても、パックが生まれてからというもの、教会で牧師先生が村の子供に勉強を教えてくださいの日以外は殆どいつも、パックの相手をしなくてはならないのだが。

午後の明るい日差しを浴びて、家の前に広がる野では、背の低い草々が気持ちよさそうに風に揺れている。パックはそこで、虫やら何やら次々に興味の対象を変えながら、子犬のように走り回っている。父も母も畑仕事に出かけていて、聞こえるのは、パックのはしゃぐ声と、鶏舎の鶏と森に住む野鳥の鳴き声くらいだ。

リーシャは何をするでもなく少しの間パックの遊ぶ姿を眺め、それからまた、朝のように、村の中心へと続く道へ顔を向けた。だが、朝同様、郵便配達人の姿は、どんなに目を凝らしても見つからなかった。

姉が約束を忘れるはずがない。きっと、明日には届くはずだ。リーシャの初舞踏会を祝う姉の手紙と、それに同封された髪飾りが。

舞踏会が一ヶ月後に迫った時期から、リーシャはそう毎日自分に言い聞かせていた。しかし、待てども姉からの便り是一向にない。最後の手紙は、ひと月以上も前だ。そこに書かれていたのは、家族の健康を願う声と、自分や夫の暮らし、天候や農作物の出来の善し悪しなどの話ばかりで、舞踏会のぶの字もなかった。

やはり、姉は自分との約束など、もう忘れてしまったのだろうか……。

リーシャは頭上で照り輝く太陽とは反対に、瞳を暗く翳らせた。その脳裏に、両親が仕立ててくれた真新しいドレスの姿が過る。そして、姉が着て、リーシャもまた着ようと決めていたドレスの姿も。

両親はきっと、リーシャが新しいドレスを着て舞踏会に行けば、喜んでくれるだろう。しかし、姉は？

あのドレスとリーシャの髪に似合う髪飾りを見つけると約束してくれた姉は、リーシャが気持ちを変えて違うドレスを着ると言ったら、どう思うだろう。姉はリーシャが、舞踏会の日姉の姿にどんなに憧れていたか知っている。もしかしたら、今この時にも、約束の髪飾りを見つけて、送ってくれているかもしれない。そうであれば、リーシャが違うドレスを着ることは、姉の気持ちを裏切ることになるのではないだろうか。

しかし実際には、姉からは何の便りもない。リーシャは顔を俯けて、その口元を固く結んだ。

忘れてしまった、そう思う方が利口なのかもしれない。姉はもうお嫁に行ってしまったのだ。もう彼女は、いつどんな時だってリーシャを一番に可愛がってくれた『リーシャの姉』ではなく、遠い町で暮らす四角い顔をした男性の奥さんなのだ。現に、たくさん手紙を書くと言った約束だって、おざなりではないか。きっともう、リーシャのことなど忘れてしまったのだ。

(どうせ忘れるくらいなら、そんな約束、最初からしてほしくなかった……)

じわりと目の淵に熱いものが滲んだ。力を入れて固く結んだはずの唇が震え出そうとするのを、リーシャが懸命にこらえようとしたその時、思わぬ方向からリーシャは名前を呼ばれた。

「よう、リーシャ」

反射的に顔をあげたリーシャは、家の裏手になる森の方から近づいてくるその人物を見とめて、慌てて目尻に溜まりつつあった涙を拭った。それは同じ村に住む、リーシャと同じ年のジョンという少年だった。「何してんだ？ ああ、パック坊主のお守りか」

幸い、ジョンは何も気付かなかったようで、そばかすのある顔に明るい日差しを浴びながら、上機嫌で近づいてきた。

リーシャは彼が釣竿とバケツを持っているのを見て、口を開いた。

「あんたは魚釣り？ 今日はおじさんの手伝いは？」

「親父が出かけるからさ、午後はいって」

ジョンの父親は腕のいい家具職人で、村に工房を持っている。ジョンもいずれ同じ仕事に就くつもりなのだろう、日頃からお弟子さんたちに混じって朝から晩まで父親の手伝いをしている。もともと、彼もまだ遊びたい盛り of 少年であるから、こうして魚釣りをしたり、村の少年たちと集まって遊んだりしていることも多々あるが。

もっとずっと幼い頃は、リーシャもジョンも、他の同じ年頃の村の子供達みんなと一緒に、大勢で遊んでいた。しかしいつ頃からか、男の子たちは男の子たちで、女の子たちは女の子たちでと、別れて遊ぶようになったため、幼い頃はしょっちゅう一緒に遊んでいた二人も今では、教会での勉強の日に顔を合わせた時や、こうして道で偶然会った時に軽く話す程度になっていた。

「見ろよ、大漁だぜ」

「ジョン！」

釣果を自慢すべくジョンがリーシャにバケツの中を見せようとした時、パックがジョンに気づいて駆け寄ってきた。

「よう、パック。元気か？」

「お魚！」

「すごいだろ。今日は本当ついてたよ」

はしゃぐパックに、中の鱒がよく見えるようバケツを地面に下ろしながら、ジョンが自慢げに言う。

「ほら、こいつ見ろよ。でっかいだろ？」

「本当、大きい。今日の夕飯は鱒料理ね。おぼさんがよろこ……あ、こら、パック、だめよ」

水を張ったバケツの中で、狭そうに体を擦り合わせるようにして泳ぐ鱒の姿に、パックはどうやら完全に興味を持って行かれたらしい。鱒を捕まえようと、バケツに手を突っ込もうとしていた。しかしそれをリーシャに止められると、パックはそれまで鱒に向けていた熱い目をリーシャに向けた。

「リーア！ パックもお魚！ お魚釣り行きたい！ 行こう！」

「ええ？ だめよ。パックはまだ小さいから、大人の人と一緒にじゃないと川に行ったらいけないって、お父さんに言われてるでしょ」

「行ーきーたーい！」

「じゃあ、今度お父さんをお願いして、魚釣りに連れていってもらおう？」

「やだ、今行く！」

パックの断固とした口調に、リーシャは内心で、また始まったと思った。自然と口からため息が漏れ落ちる。

「やだって言ったって、今は行けないの。いい子だから、」

「やだやだ、行くの〜！」

力いっぱい足で地面をどしどし踏み鳴らして、パックが声を張り上げる。思い通りに行かないことへの不満が、その小さな胸の限界に達するまで、いつも数分もかからない。あつという間に大声でわあわあ泣き出したパックに、ジョンが苦笑いしつつ横から話しかける。

「おい、パック。もう少し大きくなったら、俺が釣り教えてやるよ。だから今日は、姉ちゃんの言う事聞いとけ、な？」

「や〜だ〜！」

顔を真っ赤にして泣き喚きながらパックが、頭に置かれたジョンの手を振り払う。リーシャは痲癩を起こすパックに大きなため息を吐いて、ジョンに言った。

「放っておきなさいよ。疲れたら泣き止むわ。今日は朝からあまり機嫌が良くないの」

その間にもパックは、休むことなく手足をばたばたさせながら、世界の果てまで届きそうな大声で喚き散らす。

「うわああん、リーアのいじわる〜！」

「リーアじゃない、リーシャ！」

そのあまりの煩さに苛つとして、リーシャもまた声を強くした。しかし、リーシャがいくら怒ってみせたところで、痲癩を起こしているパックには火に油だ。

烈火のごとく更に激しく泣き出したパックと、むすつとしてそれを無視するリーシャ、両者を代わる代わる見ながら、ジョンは呆れ顔で軽く肩を竦めた。

「パックもだけど、リーシャもあんまり機嫌良さそうじゃないな」

「そんなことないわ」

「だって、口がこうなってる」

ついむつとしてリーシャは言い返したが、ジョンの顔を見て、一瞬ちょっと笑いそうになった。ジョンが、下唇を思いっきり突き出した上で、両手の人差し指で口の端をぐいと下げた、なんとも間抜けな顔をしていたからだ。

そんなリーシャの表情の変化を目敏く見抜いて、ジョンが大人ぶった顔で、しかしにやにやと笑う。

「リーシャ、小さい時から機嫌悪いとこの口になるだろ？ 知ってんだぜ」

「うるさいわね」

リーシャはジョンの知ったふうな物言いに、また少しむつとして口端を下げた。そしてすぐ自分のその表情に気づくと、気まずそうにジョンから顔を背けた。

ジョンはそれを見ると、更に顔をにやつかせた。

「なんだよ、なんかへましておばさんに怒られたか？」

「あんたと一緒にしないでちょうだい」

「あ。分かった。あれだろ？ どうせまた、ミシェル姉さんから手紙がこないって不貞腐れてんだろ？」

リーシャは何も言い返せず、思わず黙った。

リーシャが姉の手紙をいつも心待ちにしていることは、村では有名な話だ。郵便配達人の姿を探して時に村堺まで一人で出向くこともあるリーシャを、大人たちは他愛もない笑いの種に、子供たちは——特に男の子たちは、冷やかしの種にしている。

リーシャが黙ったことから凶星だと思ったジョンは、からかうように声を続けた。

「お前もいい加減、姉離れしろよなあ。ミシェル姉さんはもう嫁に行っちまったんだぞー？ そうそうお前のことに構ってられるかよ」

ジョンにしてみれば、いつもの、ちょっと意地悪な軽い冗談のつもりだった。しかし、彼のその軽口は、

今のリーシャの胸を掴むには十分なものだった。

ぎゅうっと力を込めて閉じられたリーシャの口元が、微かに震えだす。さきほど我慢して止めた涙が、一斉に出口を求めるように、リーシャの目に溜まり膨らんでいく。

だが、リーシャが顔を背けていたため、ジョンはそれに全く気づくことなく、一人ぺらぺらと大人顔で口を動かし続けた。

「それをさあ、いつまでも姉さん姉さんって、赤ん坊じゃあるまいし。知ってっか？ 赤ん坊は生誕祭の舞踏会行っちゃいけないんだぜ？」

「……………行かない」

「え？」

ジョンが、震えを堪えて絞り出すようなその低い声の調子からリーシャの変化に気づいた時には、もう遅かった。

リーシャの両の目からは、膨らみすぎて重くなった大粒の涙が、ほとほとと零れ落ちていた。

「私だって分かってるもん。姉さん、私のことなんかもう忘れちゃったんだ。約束したのに。舞踏会なんか行かない。ドレスなんて見たくもない！」

啞然とするジョンを尻目に、リーシャは吐き捨てるように言うだけ言うと、両手で顔を覆い、声を上げながらその場に泣き崩れてしまった。

ジョンは呆気にとられて、訳も分からず少しの間、泣くリーシャを突っ立って見下ろしていた。パックですら、リーシャの泣く姿に驚いて、喚くのをやめていた。

ずっと幼い頃はジョンも、限度が分からずに意地悪をして、遊び相手だったリーシャを含む村の女の子たちを泣かすことがたまにあったが、さすがに成長して、最近ではそんなことはすっかりなくなっていた。それに、彼だけじゃなく女の子の方も成長しているので、ちょっとした意地悪に対し、腹を立てることはあっても、そう簡単に泣いたりはしなくなっている。

にも関わらず、リーシャは泣き出した。今も進行形で、顔を覆って泣いている。

ジョンは現状に戸惑い、戸惑いから立ち直ると、今度は狼狽した。小さい、パックぐらいの年の子ならともかく、自分と同じ年の女の子が泣く姿を前にして、どうしたらいいのか全く分からない。カンナやノミの上手な使い方なら、頭にいくらでも入っているが、泣いている女の子の上手な宥め方など、ジョンの頭には入っていなかった。

だが、リーシャが一向に泣き止まないことと、理由は分からないものの、どうやらその原因が自分の言葉にあるらしいことに責任を感じて、ジョンは自分もまたしゃがみこむと、恐る恐るリーシャを横から覗き込んだ。

「おい、リーシャ。泣くなよ、なあ」

懇願に近い気持ちで、ジョンは言った。しかし、リーシャはしゃくりをあげながら、手で覆った顔を更に俯ける。

ジョンは困って眉尻を下げ、がしがしと頭を掻いた。

「ごめん。悪かったよ。謝るから、泣くなって。どうしたんだよ。あんなの、いつもの冗談じゃんか」

「……放っておいて」

「放っておいてって言ったって、だって…」

しゃくりの合間に八つ当たりのように、しかし悲壮な声でぶつけられた言葉に、ジョンは途方にくれた。リーシャは肩を震わせて泣き続けている。

この困った状況を何とか打破出来るものはないだろうかと、ジョンは藁にも縋る思いで、辺りを軽く見回した。

その時、ジョンの足元で大きなバツタか跳ねて、クローバーの花が小さく揺れた。ジョンはちょっと考えてから、そこら一帯に群生するクローバの花を手が届く範囲でぶちぶちと手折り始めた。

「リーシャ、ほら。これやるから、泣きやめ。な？」

リーシャは一時的に感情が昂ぶって思わず泣き出してしまったものの、そのせいで関係ないジョンを困らせているという自覚もちゃんとあった。だから、そのジョンの呼びかけにリーシャは——同じ年の男の子の前で子供みたいに泣いてしまったことへの気恥ずかしさによる抵抗は多少あったが——、顔を覆っていた手を外し、黙ったまま少しだけ顔を上げた。

ジョンはリーシャの行動に心底ほっとした。そして、安堵の笑みを漏らすと、片手に持てるだけ持ったクローバーの花の束をリーシャに突き出した。

リーシャは一度鼻を大きく吸ってから、まだ涙が伝う頬もそのままに、それを受け取った。

「…ありがと」

「うん。いや、……うん。気にするな」

一瞬ジョンは、流れで再び謝罪の言葉を口にしそうになったが、それがきっかけでまたリーシャが泣き

出しては敵わないと思ひ直し、当たり障りのない言葉を返すだけに留まった。そもそもジョンには、何故リーシャが突然泣き出したか、その理由も分からないのだ。

一方リーシャは、花を持っていない方の手で濡れた頬を拭くと、もう一度、すんと鼻を鳴らして、口で息を吐いた。それから、ジョンの顔を見ないように、じっとクローバーの花を見ながら尋ねた。

「ジョンは、舞踏会行くの？」

その問いに、ジョンは細心の注意を払ってリーシャの様子を窺いながら、遠慮がちに頷く。

「うん、そのつもりだけど。めちゃくちゃ美味しい飯が食えるって話だし」

リーシャやジョンと同じく今年十四歳になる村の少年少女で、欠席する予定の者は今のところ誰もいない。華やかな装いや豪華な料理やら、その主たる目的はそれぞれ違えど、舞踏会を楽しみにしていることはみんな一緒だ。

尋ねるべきかどうか悩んだ末に、ジョンは思い切って訊いた。

「リーシャも、行くんだろ…？」

「父さんと母さんがね。新しいドレスを用意してくれたの。舞踏会のために」

「良かったじゃんか」

質問の答えそのものではないが、リーシャがぼつぼつと言葉を落とすように言ったその内容に、ジョンは明るい声を出した。

リーシャはじっと花を見つめたまま、小さく頷いて返す。

「うん。そう。良かったの。これで、良かったの」

その目にまた涙がこんもりと溜まっていくのを見て知って、ジョンは焦った。

「わあ、ちょっとタンマ！ 泣くなって、頼むから」

「だって…」

「だってって、何なんだよ、さっきから。せめて理由を言え、理由を！」

一度完全に緩んだ涙腺は、簡単には締まらないらしい。リーシャは勝手にぽろぽろと流れ出す涙に自分でもちょっと戸惑いつつ、ぐすぐすと鼻を鳴らしながら、結局全部、胸の内をジョンに打ち明けた。

「リーシャって、ほんと赤ん坊みたいだな」

それが、話を聞き終わったジョンの第一声だった。

リーシャは頬に残った涙を手で拭いながら、ぶすっとしてジョンを睨んだ。

「分かってるわよ。いい加減姉離れしろって言うんでしょ。するわよ、どうせ姉さんはもう私のことなんか忘れちゃってるんだし」

「そうじゃなくて」

拗ねた物言いをするリーシャに、ジョンは呆れを隠すことなく、はっきりと声にも表情にも出して言う。「少しはミシェル姉さんの気持ちや、おじさんやおばさんの気持ち、考えたらどうなんだ？ リーシャ、自分のことばかりじゃなか」

「そんなことない。私だって、」

「いや、そんなことあるね。姉さんが手紙くれなくて寂しい。姉さんが約束忘れてて悲しい。自分は姉さんのドレスを着たかったのに、それが出来なくなったから悲しい。だからもう楽しみにしてた舞踏会にも行きたくない。俺からしたら、リーシャが言ってることは全部、甘やかされた赤ん坊の我が儘にしか聞こえない」

反論しかけたリーシャを遮って、ジョンがきっぱりと言い切る。その強い言い方に、リーシャは不満ながら、思わず声を飲み込んだ。

ジョンはそんなリーシャに変わらず呆れの眼差しを向けながら、躊躇うことなく口を動かす。

「ミシェル姉さんがそんな約束したのは、リーシャが泣いたからだろ。リーシャが十歳だったなら、ミシェル姉さんだってまだ十四歳かそこらだったはずだ。今の俺たちと変わらない。泣く小さい妹を見て、泣いて欲しくない、笑顔に戻してやりたいって必死だったミシェル姉さんの気持ちも、少しは考えてやれよ」

ジョンの論すようなその言葉に、リーシャは急に頭をガツンと殴られたような気持ちになった。

リーシャの中では、生まれたときから姉さんは姉さんだった。だから、その姉さんが今の自分と変わらない年齢の少女だったこと、つまり、『子供』という存在であったことなど、リーシャには考えつきもしなければ、考えようとしたこともなかった。

それこそ初めて目を開いた赤ん坊のような顔で目を瞬くリーシャを横に、ジョンは畳み掛けるように尚も続ける。

「それにさ、たとえミシェル姉さんが約束忘れてるとしてもだぞ？ その約束があったから、リーシャは今まで悲しい気持ちになることなく舞踏会のこと楽しみに出来たんだろ？ だったら、そのことだけでも、少しは感謝してもいいんじゃないのか？ おじさんたちにしたってさ、意地悪で新しいドレス用意したとでも思ってたの？ リーシャとミシェル姉さんじゃ身長が全然違うじゃん。リーシャのほうが背がずっと高いから、ミシェル姉さんのドレス着たら絶対裾が足りなくて足が出ちゃうよ。それくらい、俺にだって分かる」

「私だって、そんなことくらいは、」

「分かった？ じゃあ、着ていきたいなんて馬鹿なことなんで本気で思えるんだ？ 生誕祭の舞踏会は、女王陛下の御名を掲げた正式な舞踏会だぞ？ ロドリー村だけじゃなくて、テドール中の色んな人が招かれて集まる。そんな場所に足が出るようなドレスを着て行ったら、常識知らずの田舎娘って影で笑いものにされるって分からないのか？ 別にリーシャがそれでもいいなら俺はどうでもいいけど、結果的に恥ずかしい嫌な思いするのは、リーシャだ。親なら、子供にそんな思いさせたくないって思うのが普通だろ。お

じさんたちだって、そう思ったからわざわざ新しいドレス用意したんだろ。そういうこと、少しも考えもしないで、姉さんの真似したいって幼稚な考えにこだわって一人で臍曲げて。ちょっとは現実を見ろよ。大体、格好なんていくら真似したところで、ミシェル姉さんはミシェル姉さんで、リーシャはリーシャじゃん。何つまんないことに意地になってんだよ、馬鹿みてえ」

最後のほうは、殆ど責めるような口調だった。リーシャは、責めるように捲くし立てながらも真っ直ぐ自分を見るジョンを、睨むような、じとりとした目つきで見返しつつ、黙って唇を噛んでいた。

悔しかった。言い返す言葉も見つからない。悔しくてたまらないほどに、ジョンの言葉は正しかった。「手紙のことだってそう。考えてもみろよ。ミシェル姉さんは、たった一人で遠い、旦那さん以外誰も知ってる人がない場所に嫁に行ったんだぞ。周囲に馴染めなくて心細い辛い思いしてるかもしれないとか、リーシャ、そういう心配したことがあるか？ そうじゃなくたって、新しい環境に慣れるのは大変だと思うよ。今までと違って家事も全部一人でしなきゃいけないわけだし。自分のことで毎日一杯一杯だろうに、それでもリーシャが待ってるって知ってるから、おじさんやおばさんに心配かけないように、月一回でも律儀に手紙くれてるんだろ。ミシェル姉さんは偉いよ。リーシャとは大違いだ」

一方的に言葉を並べて、最後の最後にリーシャの胸にナイフを投げつけて、ジョンはようやく口を閉じた。

リーシャはもはや、黙り込むしかなかった。ジョンの言ったこと、その全部がずきずきとした痛みを伴って胸に木霊していた。ぐっと力を込めて固く結ばれた口元の、その口端は今やこれ以上ないほど下がっていたが、それはけしてジョンに対する不満の表れではなく、自分自身に対する気持ちによるものだった。

リーシャはこれまで、姉の境遇などろくに考えたこともなかった。ジョンが言ったように新しい環境で苦勞しているに違いないのに、そんなことは少しも頭になく、遠くへ行ってしまったことへの不満だけが気持ちの中心だった。小さな頃から姉はいつもリーシャのことを気遣ってくれていたのに、リーシャは自分のことばかりで、姉を気遣うことなど少しも出来ていなかったことに今初めて気がついたのだ。そのことが情けなく、悲しく、そして姉に申し訳なかった。

両親のことにしたって、ドレスを仕立ててくれたことには感謝の念はあったが、両親がそうする至った気持ちや、その背景にあるもののことなどは、これぼっちも考えていなかった。今朝さりげなく、部屋に行ってごらんと父の顔や、嬉しそうにドレスとリーシャを見ていた母の顔が、まざまざと思い出されて、その表情の裏にあった自分への深い思いやりを考えると、今更胸が詰まりそうになって、リーシャは自分の浅はかさに思いっきり唇を噛んだ。

最初、ジョンに自分のことばかりと言われた時は、そんなことはないと思っていたが、今ではそう思った自分が信じられないくらいだった。

自分の子供染みた憧れや我侭。それにばかり目を向けて、家族が自分にくれた一番大切なものをリーシャは見落としていたのだ。

ジョンはそれを見抜き、リーシャの子供染みた憧れや我侭を馬鹿みたいだと一蹴した。ジョンが言ったことは、言い方はともかく、すべからず真っ直ぐに的を得ていた。

舞踏会の日の姉の美しさは幼いリーシャの心に眩しく焼け付いて、幼稚な憧れを形成したが、姉が美しかったのは何も、その装いのためだけではなかったと今なら分かる。優しく綺麗な姉。姉のようになりたいと憧れるなら、その優しさをリーシャも育まねば、たとえ同じように美しく着飾ったところで、それはただの真似にしか過ぎない。それでは、姉の足元にも及ばないだろう。

リーシャは自分の幼さを恥じると同時に、横にいる、自分と同じ年でありながら、自分よりずっと広く高

い目線で周囲を見ている少年をまじまじと見た。

同じ村で殆ど同じように育ってきたのに、いつのまにか、彼だけが大人になっているような気がした。そのことに、尊敬に近い気持ちが胸に湧き上がるのを素直に感じる。しかしその一方で、なんだか面白くない気持ちが胸の底で渦巻いているのも本当で、リーシャは上手く言葉に出来ないその複雑な気持ちに口端をさげたまま、泣いた後の熱を持った目でただジョンを見つめるしか、暫くは出来そうになかった。

ジョンは、そんなリーシャの眼差しを真っ向から受けていたが、その睫や頬に残る涙の痕に改めて気づくと、思ったままずけずけと意見したことに、少しだけ、居た堪れなさを感じた。

けして自分の気持ちに反する間違っことは口にしてないという自負はあったが、相手はついさっきまで泣いていた女の子だ。幼い日、遊びで意地悪をして泣かすたびに村の大人から口を揃えて、女の子には優しくしろと怒られたことを思い出し、ジョンは気まずさに僅かに目を逸らすと、胸の内に残るまだ言葉にしてない事柄を言うべく、口を開こうとした。

しかし、ふとそこで、ジョンは動きを止めた。

そして、その一瞬後、急に忙しげに辺りを見回した顔には、確かな焦りの色が宿っていた。

「なあ、おい、パックは？」

「えっ？」

リーシャはその言葉に、弾かれたように立ち上がった。

急いで左右を見渡し、その姿を探す。しかし、明るい日差しの下に広がる見慣れた景色に吸い込まれてしまったかのように、野にも、道の先にも、パックの影はない。

「さっきまで、そこにいたんだ。リーシャが泣いてるときまで、確かに」

同じように立ち上がったジョンが、パックがいた場所を指差す。それはリーシャが、最後にパックを見た場所でもあった。泣き出す前に、癩癩を起こすパックに苛々して無視した時に。しかし、それ以降は、リーシャはまるでパックを見ていなかった。気にもしていなかった。自分のことで頭が一杯で———……。

(私は、何を……。小さな弟をほっらかしにして、一体何をしていたの！)

激しい自責の念に、リーシャは、地面と繋がったかのように足の感覚を一瞬失くした。

急速に早まった心臓が、体中に大きく鳴り響く。

「俺、鶏舎の中見てくるから、リーシャは家の中見て来い！」

俄かに顔色を失ったリーシャにジョンが言うが早い、鶏舎に向かって走り出す。

リーシャもまた、転がるようにして家へと駆け戻った。

「パック？ パック！」

玄関のドアを一歩入るなり、叫ぶように声を張り上げ、パックを呼ぶ。しかし、がらんとした屋内は他人顔で、リーシャの声を壁に響かせただけだった。

リーシャは落胆する暇なく二階に駆け上がった。音を立ててすべての部屋のドアを開けて回る。

「パック！ お願い、返事して！」

しかしいくら目を皿のようにして見回しても、どこにも、小さな弟の痕跡は見つからない。

焦りと不安で胸が散り散りになりそうだった。動揺に足元を掬われそうになりながらも、再び一階に戻り、台所に駆け込んだところで、リーシャは、勝手口から入ってきたジョンと鉢合わせた。

「いた！？」

「こっちにはいない。そっちは？」

固い表情を浮かべるジョンに、リーシャは押し潰されそうな不安に涙を滲ませながら、首を横に振った。「どうしよう、パックが…。私がちゃんと見てなかったから、私のせいで、怒ったりしたから、パック、」
「落ち着け。もしかしたら、村のほうに行ったのかもしれない。俺が行って探してくるから、リーシャはおじさんとおばさんに、」

自己嫌悪の波に浚われてパニックに陥るリーシャの腕を揺さぶるように掴んで、ジョンがそう言いかけた時、不意にリーシャの目に、ジョンの背後にあった、じゃがいもが山積みにされたバケツが、大きな存在感を持って飛び込んできた。

『リーア！ パックもお魚！ お魚釣り行きたい！』

脳裏に蘇る声に、リーシャの目がバケツを映したまま恐怖に凍りつく。リーシャのその著しい表情の変化に、ジョンが眉根を寄せる。

「リーシャ？」

「……か……、」

「え？」

体中の血が一気にすべて、消えうせた気がした。リーシャは真っ青な顔でジョンを見やり、震える口で何とか声を言葉にした。

「まさか、あの子…、一人で川に行ったんじゃ……」

エルダーの北の山脈に連なるグライニエ山の中腹から流れ来る川は、この時期、雪解け水により一時的に水嵩を増しはするものの、その流れは比較的穏やかだ。

しかし、その穏やかさに気を許し、森の木々の木漏れ日が反射する澄み切った水面に誘われるがまま、無闇に足を踏み入れようものならば、取り返しのつかない愚かな結末に繋がりがかねない。

原因は、川底の地形だ。

岸から数フィートのところまでは浅瀬で、子供でもふくらはぎが濡れる程度の深さだが、ある地点を過ぎると、突然底を失ったかのように深くなる。大人でも足がつくつかないかのその淵に落ちたら最後、小さな子供など簡単に流れに飲まれてしまう。しかも悪いことに、川の水は澄み切っていて光をまともに反射するため、川底の高低差が肉眼では分かりにくい。泳ぎに慣れた大人でも、淵にはまって溺れることが時としてあるほどだ。

そういった危険から子供たちを遠ざけるため、村の大人たちはある程度の年齢に達するまで、子供だけではけして川に行かせないようにしていた。

リーシャも幼い頃は川に近づくことを両親にきつく禁じられていたし、またパックが歩けるようになり、その世話を任されるようになってからは、改めてまた、川に潜む危険について念押しされてもいた。

辿り付いた最悪の可能性に背筋を凍らせ、リーシャは、ジョンを跳ね飛ばす勢いで押しのけ猛然と家から飛び出した。

「リーシャ！」

ジョンも血相を変え、すぐさまその後を追って駆け出す。

「待て、俺のほうが足が速い！ 俺が行くから、お前は誰でもいいから大人を連れてこい！」

しかし、川を目指して無我夢中で森へと突き進むリーシャには、ジョンの声など少しも耳に入っていなかった。全身の細胞が凄まじい吸引力でパックを求めているかのように、猛烈な勢いでリーシャの足を突き動かしていた。

ジョンは小さい舌打ちをひとつして、足を更に早めた。そして瞬く間にリーシャに並び、追い越した。

「先行くからな！」

怒鳴るように言って、ジョンが川へと続く森の小道を駆け抜けていくのを、リーシャもまた全速力で追った。

でこぼこした木の根や飛び出した石に幾度も足を取られそうになりながらも、がむしゃらに体勢を立て直し、足を前へと走らせる。

今にも心臓が爆発して肺が破れそうだった。途中避けきれずに、垂れた枝の先が頬を掠ったが、そんなことに構う余裕などない。パック。パック。パック。それしか、頭になかった。自分の持てる力全部で、リーシャは森の中を疾走した。

やがて前を行くジョンの向こう、木立の合間に、光る水面が見えた。

リーシャは我も忘れて、喉も破れんばかりの大声を張り上げた。

「パック！！」

その声に、水面の上にちょこんと乗ったような小さな影が振り向く。リーシャがその影の動きを確認するのとほぼ同時に、リーシャより僅かに早く岸に着いたジョンが、勢いよく水を掻き分けて川に入っていく音が木立の中に響いた。

「パック！」

それは確かに、パックだった。膝近くまで川に浸かってはいるものの、パックに違いなかった。きよとんとした顔で、水しぶきをあげて近寄ってくるジョンを見上げている。

名を叫びながら、リーシャはようやく木立の中から、川岸に躍り出た。パックは川の中腹近くの、後三步でも足を先に進めたら淵に嵌るだろう、ぎりぎりの位置にいた。それを改めて目で知り、リーシャは寒気だった。

「パック、動いちゃだめよ！ じっとしてなさい！」

殆ど吠えるように言いつけ、自らも、ばしゃばしゃと水面を荒立てて川に分け入る。リーシャのその尋常ならざる様子に、パックがきよとんとした表情から一変して、大声で泣き出す。時同じくして、ジョンがその二本の腕でパックを無事抱き上げた。

「大丈夫だ、もう大丈夫」

安堵で顔を綻ばせながらジョンが言い、パックを抱いて戻ってくる。その僅かな間すら待ちきれず、スカートの裾をずぶ濡れにしながら、リーシャは二人の方へ向かった。そして、安堵と恐怖がごちゃまぜになったしわくちやの顔で、遮二無二にジョンからパックを受け取ると、その小さな体を強くかき抱いた。

「パック！ ああ、パック、良かった！」

「ごめんなさいい」

泣きじゃくり抱きついてくるパックを胸に、恐怖と緊張で張り詰めていたリーシャの目からも、熱い涙が溢れ出す。

いくら強く抱きしめても、抱きしめ足りなかった。パックの柔らかく小さな耳に顔を摺り寄せ、その温もりを何度も肌で確かめ、これ以上に大切なものなどこの世にきつとないと、そう強く思うと同時に、失わずに済んだこと、その喜びと感謝に体が震えた。

リーシャは、押し寄せる感謝の念に肩を震わせながら、パックをきつく抱いたまま、涙で濡れそぼった目でジョンを見やった。

「ジョン、ありがとう。本当に、ありがとう」

「おう」

ジョンは指で鼻を拭うように擦りながら、心底ほっとしたのだろう、力の抜けた笑いを返した。それから、不意にリーシャの手元を見て、小さく吹き出した。

「リーシャ、なんでそんなのいつまでも大事に持ってんだ」

「え？」

リーシャはジョンの可笑しそうな目線を追って、初めてそれに気がついた。パックを抱きかかえながらも、リーシャはジョンから貰ったクローバーの花の束をしっかりと握って離すことなく片手に持っていた。

「本当。気がつかなかった。必死だったから」

無意識の自分の行動に、リーシャはジョンと顔を見合わせながら、同じように笑った。

花は可哀想に、無我夢中の状態だったリーシャから強く握り締められ過ぎて、くたりと頭を垂れてしまっていたが、それがもたらした小さな笑いは安息の毛布となって、極度の興奮と動揺に乱れ疲弊したリーシャとジョンの神経を柔らかく包んでいった。

「どうしてこんな危ない真似したの」

川から少し離れた岩場の比較的平らな岩の上で、パックを膝に乗せて座り、ずぶ濡れになった靴を脱がせてやりながら、リーシャはパックを背後から覗き込んだ。

その頃にはもう、リーシャは随分と落ち着きを取り戻していた。とはいえ、まだパックから手を離すのが嫌で、ずっと膝に抱いたままではあったが。

パックももう泣いてはいなかった。しかし、リーシャに背中をぴたりとくっつけて俯く小さな顔には、いく筋も涙の痕が残っていて、リーシャは思わずその丸い頬にキスを落として、それからまた続けた。「ちゃんと見てなかった私が一番悪いのは分かってるわ。でも、川に行ったらいけないってこと、パックだって分かってたはずでしょ。ひとつ間違えたら、もう二度とお父さんにもお母さんにも会えなくなってたかもしれないのよ？」

自分で言ってリーシャは、本当にその可能性があったことに、ぞっとして身震いしそうになった。

そんなリーシャの言葉に、近くで、同じくびしょ濡れになった靴を脱ぎ、濡れたズボンの裾を絞っていたジョンが、頷くように口を挟む。

「でも本当良かったよ、大事にならなくて。寿命が縮まるかと思った」

リーシャは、日が当たる場所にパックの靴を置きながら、しみじみとした声を出した。

「本当にジョンがいなかったら、どうなってたか。パック。ジョンにお礼言いなさい。あんたの命の恩人よ」「俺がいたから助かったってわけでもないよ。パックの運が良かったんだ」

ジョンは、絞ったものの、すぐに乾くでもないズボンの裾を邪魔そうに膝まで押し上げながら、淡白に言って返した。

だがその後、裸足でぺたぺたとリーシャの横まで来て、パックに視線を合わせるべく屈んだジョンの次の声には、さっきと違い、強い重みがあった。

「でもな、パック。運ってというのは、そうそう二回は続かないんだ。だからもう絶対、一人で川に行こうなんて思っちゃだめだぞ？ 魚釣りくらい、おじさんに言えば、いつだって連れていってもらえるんだから」「そうよ、パック。そんなに魚釣りに行きたいなら、明日にでもお父さんに、」

リーシャはジョンに心から同意して、口を動かした。しかしリーシャが全部言い終わらないうちに、パックが、ぼつりと、訴えるような声を漏らした。

「だって、リーアが…」

「私が、何？」

だつての後に続いた自分の名前に、リーシャは首を傾げつつ、背後からパックを覗き込んだ。

パックは、その視線から逃れるように俯いて言った。

「リーアが泣いてたから。パック、お魚欲しかった」

「ええ？」

リーシャは思わず、眉を歪めた。自分が泣いたことと魚が、どう関係しているのか、まったく分からない。

困惑するリーシャの横で、その時ジョンが、ぱっと閃いたように声を上げた。

「あ。あれか。俺がリーシャに花やったから？ 自分もリーシャに何かあげたいって思ったのか、お前」

「え？」

やや驚いてジョンを見たリーシャの胸元で、パックがもぞもぞと上半身を振り返らせてリーシャを見上げた。反射的にパックのほうに顔を向けたリーシャは、その表情に一瞬言葉を失った。

パックは目に一杯涙を溜めながらも、泣くまいと必死に、眉間と口元に皺を寄せていた。

「泣かないで、リーア。パックいい子にする、泣かない。お魚もあげる。だからリーア、泣いちゃやだ」

涙で震える目で懇願するようにそう言ったパックに、リーシャは、湧き上がる熱いもので、胸と喉を一気に詰ませた。

「……おバカさんね……」

それだけ言うのが精一杯だった。小さな弟が自分に向けている無垢な気持ちに、鼻の奥が沁みるように痛んで、息が苦しかった。だが、それは嬉しさや喜びに近い苦しさだった。

リーシャは大きく鼻を吸ると、溢れだそうとする涙を堪えることなく、膝の上のパックを強引に引き寄せた。

「リーア、泣かないで」

リーシャの頬に新たに流れ出した涙を見て、パックが泣きそうな声をあげる。リーシャはその小さな体をぎゅっと抱きしめた。

「泣いてない」

「でも、」

「パック」

不意に横から話しかけられて、パックは泣きべそをかきかけた顔をジョンに向けた。ジョンは笑っていた。

「姉ちゃんに泣いてほしくないなら、勝手にどっか行ったりしたらだめだ。パックがいてやらないと、姉ちゃん寂しくて、それこそずっと泣き止まなくなるぞ」

ジョンの言葉に、パックは目を瞬かせた。そんなパックの頭に手を置いて、ジョンは力強く続ける。

「それにな、もし姉ちゃんが泣いても、慰めるのにパックだけは、魚も花も何もいらんないんだ。パックがいるだけで、姉ちゃんはすぐ元気になるから」

パックは再び目を瞬かせて、リーシャを見上げた。

「ほんとう？」

リーシャはパックを見つめ返して、落ちる涙に、はにかみながら頷いた。

「本当。パックが元気に笑って傍にいてくれたら、それだけで、すごく嬉しい。物なんか何もいらんない。パックの方が、ずっと、ずっといい」

「な？」

ジョンはパックを納得させるように、にっこり笑うと、その笑みを悪戯っぽいものに変えて、リーシャが座っている岩の上を指差す。

「見てみるよ。俺があげた花なんて、パック探すのに夢中で握りつぶされてる上に、放り出されてるんだぜ？ ずーっと抱っこされてるパックとはえらい違いだろ」

そこには確かに、リーシャの手から離された花たちが、そのままの形で放置されていて、おふぎけが多分に混じったジョンの非難の声に、リーシャは泣きながらも、思わず声をあげて笑ってしまった。

それに対し、ジョンがからかうように肩を竦めてみせる。

「ほらな。もう笑った。すごいな、パックは」

パックは少しの間、きよとんとした顔でリーシャとジョンを交互に見ていたが、二人ともが笑っていることを分かったら、自分もまた、その丸い頬に大きな笑みを浮かべたのだった。

太陽が西へと少し傾いて、地面に落ちた影が長く伸びてきた頃、リーシャとジョンは並んで家路についた。

リーシャは疲れて眠ってしまったバックを抱いて、ジョンは履くにはまだ湿りすぎている三人分の靴を持って、行きは脇目も振らず駆け抜けた森の小道を、今度はゆっくりと。

途中、青々と茂った木の葉の間に鳥の巣を見つけたり、低い茂みの中に赤く色づいた野苺を発見したりしながら歩くリーシャの顔は、今朝の空と同じように、晴れ晴れとしていた。

姉との約束のことも、姉のドレスのことも、考えるとまだ、甘噛みするような痛みを胸に過ぎらせはしたが、それらはもう、リーシャの口元から笑みを奪いさるほどの大きな問題ではなくなっていた。それどころか、どこか遠い日の思い出のようにさえ、リーシャには感じられた。

「今日は、本当にありがとうね、ジョン。いてくれて、本当に助かったわ」

家に着き、バックを一階のベンチに寝かせてから、リーシャはもう一度外に出ると、ジョンから靴を受け取り、お礼を述べた。

「花も、ありがとう。萎れちゃったけど……」

「リーシャが、力いっぱい握り締めるからだろ。もうリーシャには花はやらない」

「ごめんねったら」

笑って謝るリーシャに、ジョンもまた明るく笑う。そして、柵近くに置きっぱなしだった釣竿とバケツを取りに向かい、思い出したようにリーシャを振り返った。

「あのさあ、リーシャ」

「なあに？」

「ミシェル姉さんも、リーシャと同じだと思うよ」

「え？」

「リーシャがバックに対して思ってること、そのまま、ミシェル姉さんのリーシャに対する気持ちと同じなんじゃないかなってこと」

立ち尽くすリーシャに向かって、ジョンが真っ直ぐに言う。

「もしいつか、バックと遠く離れて暮らすようになって、一年に一回くらいしか手紙も書けないようになって、リーシャ、バックのこと忘れてりしないだろう？ ミシェル姉さんだって、きっとそうだよ。どんなに離れてたって、リーシャのこと忘れるなんてこと、ないよ。他のことは忘れてりするかもしれないけど、リーシャを忘れることは絶対ない」

断言するように言われたことの内容に、リーシャは、すぐには言葉を返せなかった。あまりにも沢山の様々な感情が胸の中に一挙に氾濫して、そのひとつひとつを正確に感じ取ることさえ難しかった。

しかしやがて、その沢山の様々な感情は、大きなひとつの塊となって、リーシャの胸を熱く震わせた。

「…うん……」

リーシャはそれを噛み締めるように、ゆっくり頷いた。それから、もう一度、今度はジョンによく伝わるよう、はっきりと強く頷いてみせた。

「うん！」

ジョンは満足げに笑って返した。ほんの少し照れくさそうに鼻を擦り、そのままリーシャに背を向ける。

その背に向かって、リーシャは今一度大きく言った。

「ありがとう！」

「おう」

体を少し斜めにして振り向いたジョンが、片手を軽くあげてみせるのに、リーシャも腕を高く上げて振って返す。

そうしながらリーシャは、橙色と黄金色の混ざった柔らかな西日に照らされ、遠ざかっていくジョンの後ろ姿を、一人見えなくなるまで見送った。

その口元に清々しい笑みを浮かばせたリーシャの、その心の有り様は、まるで初夏の透き通った風のように明るく、どこまでも澄み渡っていた。

その日から、約三週間後。

ジョンや他の村の仲間たちと一緒に生誕祭の舞踏会に出かけたリーシャは、真新しい、美しい水色のドレスに身を包み、誰よりも幸せそうだった。

ドレスに合わせ、綺麗に結われた髪には、姉から贈られた白い花の髪飾りが、その笑顔と同じくらい、眩く光っていた。

(了)

clover from Rodley
<http://p.booklog.jp/book/96886>

著者: 浜田 薫
著者プロフィール: <http://p.booklog.jp/users/nococococo/profile>

感想はこちらのコメントへ
<http://p.booklog.jp/book/96886>

ブックログ本棚へ入れる
<http://booklog.jp/item/3/96886>

電子書籍プラットフォーム: ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)
運営会社: 株式会社ブクログ